

叡尊における石塔勸進考

辻 富 美 雄

序

弘安九年嚴寒十一月に山城国宇治の地に天地一線に結ぶかのようにそびえる十三重石塔が造立された。西大寺叡尊上人を導師とし、二百人を越える律僧により供養会が催された。塔造立は願主・勸進者・石工の三者によってなされる。これは鎌倉仏教の流布とともに始まり、宇治塔にその粋が結実した。

小稿は、石塔勸進について、特に西大寺の場合をとりあげ、寺と石工の関係、また叡尊における塔勸進の意義を考えるものである。さらに西大寺末寺形成過程における塔の意義、その特徴をも合わせて考えたい。

石塔研究は、石造美術として美術的見方の研究に限られ、そのもつ歴史的意味の検討は、故川勝政太郎氏^①、田岡香逸氏^②などごく少ない人の手によっていた。近年、伊藤唯真氏^③、藺田香融氏^④などにより中世世界復現の一助に研究されるようになった。

一 伊派石工集団と寺院

石造物の造立には、各々に願文をつくり、勸進僧によって供養がおこなわれている。ここで問題となることは、

塔造立に關与する勸進僧と塔造立を実際に進める石工の關係、さらには、大きく寺院と石工の關係の實際的結びつきがどうであつたかという点である。

石工には藤原・橘・大藏・伊姓を名乗る工人が多い。しかし、その分布は広範圍にわたり、系統だつて名が追えるものは極めて少ない。これら石工の中でも、製作開始時期がわかり、さらに何代かに互る遺品が残る伊派石工の作品群を分類することにより、石工と寺院の結びつきを探りたい。

伊派石工集團の石造品についての研究はすでに、西村貞氏「鎌倉期の宋人石工とその石彫遺品について」^⑤があり、その後さらに、川勝政太郎氏「伊行末系石工とその作品」^⑥によつて詳細に研究された。

以下すこし、川勝氏の研究に従つて遺品をみて、造立遺品を勸進聖・発願者の所屬寺院・施入所の本末關係を調べ、伊派石工製作と寺院の關係をみていきたい。ただし石造遺品の銘文は省略する。

(1) 大藏寺十三重石塔（奈良県宇陀郡大宇陀町栗野 大藏寺）

この塔は、釈迦を主とし、当來導師弥勒仏による往生極樂を願う道俗三千余人の結縁により、延応二（一二四〇）年、大工伊行末により造立されている。『金剛佛子觀尊感身学正記』弘安六年三月、觀尊は大藏寺で授戒会を行なっている。このように大藏寺は觀尊と關係の深い寺であることがわかる。

(2) 般若寺十三重石塔（奈良県奈良市般若寺町 般若寺）

この塔は無銘であるが、塔第三重目屋根石より、墨書のある木製經箱が納入されており、建長五（一二五三）年の銘がある。^⑦般若寺は、荒廢していたものを、觀尊・良恵上人が再興発願を行ない、復興した。その後、西大寺末となる。^⑧

(3) 東大寺法華堂石燈籠（奈良県奈良市 東大寺法華堂）

この石燈籠は東大寺法華堂に施入され、建長六（一二五四）年、伊行末の作である。

(4) 般若寺笠塔婆（奈良県奈良市般若寺町 般若寺）

弘長元（一二六一）年七月十一日伊行吉により、父行末の三回忌供養、存命中の母のために般若寺へ造立の旨が刻まれている。同時に金剛界五仏・胎藏界五仏を種子で、光明真言・大随求小咒をそれぞれ梵字で刻んでいる。これをみると釈迦三尊・弥陀三尊をいただき、金剛界・胎藏界五仏をそなえ、金剛不二を実現し、陀羅尼による極楽往生可能なることを表現し、

大功徳結縁畢。願以_二此功徳_一救_二不明_一詣極樂界都一切衆生。^⑩

と結縁者の極楽往生も願う。そこには釈迦三尊とともに光明真言による西大寺律宗叡尊の影響が大きくみられる。

(5) みろく辻線刻弥勒磨崖仏（京都府相楽郡加茂町岩船 みろく辻）

文永十一年に伊末行によって刻まれている。この磨崖仏は笠置寺弥勒磨崖仏を模して造られており、大野寺の場合同様、興福寺の關係が考えられる。

(6) 法泉寺十三重石塔（京都府綴喜郡田辺町草内 法泉寺）

弘安元（一二七八）年に勧進聖良印と伊末行により造立されている。良印は『唐招提寺禮堂釈迦如来像納入文書』の結縁人名中にみられ、西村氏は西大寺僧の可能性を示唆している。^⑪ 釈迦念仏を信奉する良印によるものであるが、寺には西大寺叡尊によるという伝えがある。

(7) さんたい弥陀三尊磨崖仏（京都府相楽郡加茂町岩船）

永仁七（一二九九）年に岩船寺僧が願主となり、伊末行により刻まれている。岩船寺は興福寺末である。

(8) 大宇陀春日神社塔基礎（奈良県宇陀郡大宇陀町松山 春日神社）

石塔基礎を転用し、水鉢に使用している。正応四（一二九一）年に伊行元により造立されている。銘文中「南無當來導師弥勒仏」は、大蔵寺塔銘文にもあり、この塔も釈迦如來を本体とし、當來導師として弥勒仏を刻んだものである。同地は叡尊上人により授戒会が行なわれたりし、西大寺の影響の強いところであった。これらのことより、西大寺に關係して造立されたものと想われる。

(9) 談山神社十三重石塔（奈良県桜井市多武峯 談山神社）

永仁六年に大工伊行元により造られている。多武峯妙樂寺はもと釈迦・弥陀・地藏の土仏丈六三体をまつていたが、承元二年二月三日の合戦により焼失し、塔建立當時は不明。

(10) 石仏寺弥陀石仏（奈良県生駒市藤尾 石仏寺）

丸彫り定印弥陀坐像で、光背部左右に觀音・勢至菩薩を刻出し、弥陀三尊像としている。永仁二（一二九四）年、大願主行仏、大工伊行氏により造立されている。大願主行仏は東大寺僧と考えられ、重源上人以来の弥陀三尊による往生を願ったものであらう。

(11) 無量寺五輪塔（奈良県生駒市一分 無量寺）

嘉元二（一二三〇）年に、慈勝・入西・願礼・心阿弥が願主となり、伊行氏の手による。この塔は二親供養と行基菩薩恩報に果いるべく結縁し、造立された。比丘入西は『竹林寺略録』に入西上人とみえる。この塔が東大寺末の竹林寺の關係において造立されたと考えられる。

(12) 保月多宝塔（岡山県上房郡有漢町大石）

嘉元三（一二三〇）年に願主西信・大工井野行恒により造立されている。大願主沙弥西信は、「叡尊の侍者としてその看願をうけた人」であることより、叡尊の影響をうけたものであらう。この塔で注目されることは、西信の下

向に、行恒が同行し、製作をしていることである。これは僧と石工の関係を知る上で重要である。

(13) 保月六面単制石幢（岡山県上房郡有漢町大石）

嘉元四（一三〇六）年に、西信・西阿・大工井野行恒により造立されている。この塔も(12)塔同様、西大寺系にはいるであろう。

(14) 立石三尊卒都婆（岡山県上房郡有漢町立石）

嘉元三（一三〇五）年に漆真時が大願主となり、井野行恒により造られている。漆真時は不明であるが、(12)(13)塔同様、西大寺と関係があるものとみられる。

(15) 南田原弥陀磨崖仏（奈良県添上郡南田原町長谷）

元徳三（一三三二）年、東大寺大法師定註が願主となり、伊行恒によって刻まれている。

(16) 高家春日神社五輪塔（奈良県桜井市高家 春日神社）

暦応二（一三三九）年、陀羅尼衆が願主となり、行恒により造られている。この地は興福寺の関係する土地であるため、それに関連するものであろう。

(17) 多田院石燈籠（兵庫県川西市多田）

暦応三（一三四〇）年、勧進聖教尊・願主尼心蓮・大工行経により多田院に施行されている。多田院は西大寺末であり、勧進聖教尊は『興正菩薩坐像胎内文書』にみられる。願主尼心蓮は『西大寺西僧房造営同心合力奉加帳』に齊戒衆として名をつらねている。

(18) 笠神磨崖碑（岡山県川上郡備中町笠神）

成羽善養寺僧が大勧進となり、西大寺僧実専が奉行代として実行している。その際伊行経も石切大工として同行

している。成羽善養寺は西大寺末となっている。

(19) 地藏峯寺 地藏石仏（和歌山県海草郡下津町橋町 地藏峯寺）

元享三（一三三三）年に勧進聖心静と伊行経によって造立されている。地藏峯寺の所在する橋本は東大寺領木本庄であり、東大寺との関係が考えられる。

(20) 旧八幡大乘院石燈籠（現在―福岡県北九州市箱崎町 筥崎宮）

八幡大乘院金堂の燈籠として、尼了法と一結衆が井行長と協力して造立している。八幡大乘院は叡尊が幾度となく講義を行ない、西大寺末となっている。

(21) 鳳閣寺宝塔（奈良県吉野郡黒滝村鳥住）

鳳閣寺は醍醐寺三寶院当山派末である。

(22) 東大谷日女神社石燈籠（奈良県桜井市山田）

勧進行念・大工行長により永和元（一三七五）年に造立されているが、帰属は不明。

以上、承元元年より永和元年にまたがる約百七十年間の伊派石工の作品として確実な二十二点を瞥見し、その寺院・施入所の本末関係所属をみた。つぎにその数をあげる。

西大寺系……十一點 東大寺系……五點

興福寺系……三點 不明・その他……三點

これによると伊派製作の二十二点の石造遺品のうち、醍醐寺に關係する(21)・帰属不明の(19)(22)を除く十九点はすべて、西大寺・東大寺・興福寺のいずれかに關係をもつことがわかる。これは川勝氏の指摘にもあるように、伊派石工集団と南都三大寺院と非常に密接な關係をもっていたことを裏付けるものである。

つぎに、三大寺院のそれぞれの遺品数を比べると、西大寺系が十一點あり、全遺品の半数を占めている。これは伊派石工製作の中心が西大寺との関係においてなされていたことを示すものであろう。

伊派二十二点の分布をみると、大多数は大和を中心とする畿内に集中している。その中で、作品(12)(13)(14)(15)の四點は備中国で製作されている。(12)(13)は叡尊の影響を受けた西大寺勸進沙弥西信が願主となり、伊野行恒が製作をしている。(14)も近隣に造立されていることから同じような製作過程を歩んだものであろう。これは、西信の備中国での勸進に伊野行恒が大和より同行したことを示す。作品(15)は地元の成羽善養寺から大勸進職が出、工事指揮は南都西大寺僧実専が奉行代になり行なっている。これらは西大寺僧と伊派石工の共同作業の結果である。

伊派作品のうち西大寺系の占める割合、さらに遠隔地での西大寺僧との共同製作からつぎのことが考えられる。伊派石工集団は南都三大寺院の作品を造りつつも、西大寺にその主体がおかれていることがわかる。さらに、西大寺に製作主体がおかれていたという以上に、西大寺に石造物製作集団として組みこまれていたことを示していると考える。このような寺院と石工の間に強い関係を想定してこそ、勸進聖との同行が可能になるであろう。つぎに、二十二点の遺品を、その形態において分類し、各寺との関係を見る。

十三重石塔 西大寺系四・不明一

塔 婆 西大寺系三

多宝塔 西大寺系一・醍醐寺系一

五輪塔 東大寺系一・興福寺系一

石燈籠 西大寺系二・東大寺系一・不明一

磨崖仏 東大寺系一・興福寺系二

丸彫石仏 東大寺系二

これによると十三重石塔と塔婆は西大寺系に造立されている。磨崖仏は、弥勒信仰を主体とする興福寺にその中心がおかれ、丸彫石仏は東大寺系の造立にすることがわかる。これは、寺院の石造物造立の場合、自己の信仰主体と関連し、造立形態が限定されていることを示している。すなわち各寺院との混在した信仰のなかで、独自の信仰をもって各地に出、そこでの作善、勧進造立を行なったことがわかる。鎌倉時代多様化した宗教界において、各寺院ごとに自己の信仰主体と他宗のそのの相異を集まる道俗結縁の人々に造形的により明確に表わそうとした結果ではなからうか。

二 叡尊における多重石塔の意義

前章において西大寺と石造多重層塔の關係が密接であることがわかった。この章では、造塔・社寺勧進を積極的におこなった西大寺中興の『金剛佛子叡尊』における多重層塔の意味を考えたい。

叡尊上人の伝記・作善集として『金剛佛子叡尊感身学正記』^⑭（以下『感身学正記』と略称する）『西大寺勸諭興正菩薩行實年譜』^⑮（以下『行実年譜』と略称する）がある。両者に記載されている多重層塔造立勧進の記事から、叡尊における多重層塔のもつ意義を考える。

つぎにそれらを掲げる。

(1) 「暦仁一年」八月から九月。

又流記曰。四王堂八角塔一基五重露盤未押金薄。即佛舍利可爲當殿本尊之旨顯然。故告當寺五師慈心。爲彼五師沙汰。以九月上旬。立八角五重石塔。即奉納予所持佛舍利一粒畢。^⑯

これによると、四王堂の中心として本尊舍利を納めていた木造八角五重塔を八角五重石塔に造りかえ、叡尊自身の所持する舍利を一粒納入し、復元したことがわかる。八角五重石塔は木造八角五重塔にかわるものであり、「当殿本尊」である仏舍利を納入する舍利塔として造られていることがわかる。

従同月卅日。一寺男女奉爲供養舍利。受持八齋戒。可爲毎月勤行^{云々}。^⑭

このように四王堂本尊舍利塔再興後毎月舍利供養がおこなわれている。

さらに『行実年譜』の暦仁一年十月には、

廿八日結^三界西大寺^二而爲^三弘律之場^一諸^二覺盛律師^一秉^三羯磨^一菩薩唱相^{有^レ別^レ記^レ録}翌日始行^三四分衆法布施^一。^⑮

とあり、十月二十八日に西大寺を結界し、覺盛律師をむかえ、弘律の道場としている。再興された八角五重石塔は単に四王堂本尊の舍利を納める舍利塔としてだけではなく、弘律道場の中心的存在を示すシンボルタワーとしての意義をも持つものであった。言いかえれば、舍利塔としてだけではなく、釈迦の仏体そのものを示すものとして考えられたのではなからうか。

(2)「弘安八年乙酉八十五歳」八月

十一日。著^三兵庫^一。十二日。説^三十重意^一。十三日。於^三安養寺^一。九百七十二人授菩薩戒。隨分殺生禁斷狀。一千七百餘人姪女等毎月持齋。十四日。石塔供養。略曼荼羅供。^⑯

播州法華山下向の帰り八月十一日に兵庫に着き、十三日に授戒を、十四日に石塔供養を行なっている。旧安養寺の近くには現在清盛塚として伝承された、「弘安九年二月日」の十三重石塔があり、叡尊の勸進であろうと推定されている。^⑰

(3)『行実年譜』「弘安九年丙戌」の条。

菩薩八十六歲。宇治雨寶山橋并宇治橋修造已成。啓建落成佛事^②。

宇治橋修造にさいして、梵網經講読に集まる聴衆のうち、漁人が發心して、舟網など殺生具をなげだした。その供養として川中に小島を築き、殺生具を埋めた。石塔造立の記載はこれにつづき、

而表五智十三會深義^③。以造五丈十三層石塔^④。建之嶋上^⑤。

漁人の發心によつて築かれた島上に十三重石塔を造立している。宇治に建てられた十三重石塔は五智十三會の深義を表わすものであることがわかる。

また石塔には、つぎのような願いがこめられている。『行実年譜』には、

意欲^⑥救^⑦水陸有情^⑧也。所謂河水浮^⑨塔影^⑩。遠流^⑪滄海^⑫。魚鼈自結^⑬善緣^⑭。清風觸^⑮支提^⑯。廣及^⑰山野^⑱。鳥獸又免^⑲惡報^⑳。其爲^㉑利益^㉒也。不^㉓可^㉔測也。卽而教^㉕漁人。曝^㉖布爲^㉗活業^㉘。又時有^㉙龍神^㉚。從^㉛河而出來。從^㉜菩薩^㉝親受^㉞戒法^㉟。歡喜遂去亦不^㊱見矣^㊲。

水に映える塔影が広く世界隅々までおよび、人間はもとより生きとし生けるものすべてにわたり、竜神にさえもその功德をさずけるものである。

十三重石塔銘文にはさらに、

於^①橋南^②起^③石塔^④一十三重^⑤於^⑥河上^⑦奉^⑧安^⑨佛舍利并數卷之妙典^⑩載^⑪在副紙^⑫令^⑬納^⑭衆庶人等與善之名字^⑮須^⑯預^⑰巨益^⑱法界體性之智形^㉑。

これによると塔内には金銅製・水晶製五輪塔形舍利塔数個と功德大なる經典・法花經などを納入している。この塔は(1)の場合と同様、舍利を納め、「法界體性之智形」として、すなわち釈迦の仏体として造立されていることがわかる。

さらに「衆庶人等與善之名字」を記した結衆結縁名帳も同時に納入している。これは、名を連ねた結縁者を極楽に導きこうとするものである。

このような石塔造立を行なうことによって得られる功德について『覺禪抄』にはつぎのようにみえる。

寶積經云。作^二石塔^一一人。得^二七種功德^一。一千歲生^三瑠璃宮殿^一。二壽命長遠。三得^二那羅延力^一。四金剛不壞身。

五自在身。六得^二三明六通^一。七生^三彌勒四十九重宮^一。^②

これによると塔造立者には七種の功德が付与され、弥勒四十九重宮へ導びかれることがわかる。すなわち、宇治浮島に造立された十三重石塔に納入された名帳に名を連ねた人はひろく、法界衆生に至るまで弥勒浄土へ導びくことを意図するものである。

以上、『感身学正記』・『行実年譜』にみられる三基の多重石塔の造立のもつ意義について考えた。これらより考えられる叡尊上人における多重石塔とは、五智十三会の深義を表わし、仏舍利を納入することにより、法界体性の智形となり、釈迦の仏体そのものとなっていることである。さらに、塔は弘律道場の中心的存在であり、その存在が永遠の弘律道場となりうるのに必要なものであった。加えて、造塔功德により法界衆生を弥勒浄土に導くことを示すのである。このように多重石塔は弘律の中心的存在であり、諸人を弥勒浄土へ導くためのシンボルタワーであった。

三 叡尊と舍利・悲華經・光明真言

第二章でみたように石造多重層塔は舍利塔であり、弥勒浄土へいざなう、弘律道場の中心塔であることがわかった。この章においては叡尊の舍利信仰とその背景を考えることにする。

叡尊は舍利信仰の形示表現として舍利塔の造立を行なっている。暦仁一年九月上旬に西大寺四王堂の木造八角塔を八角五重石塔に再興し、

卽奉_レ納_二予所持佛舍利一粒_一畢。從_二同月卅日_一。一寺男女奉_レ爲_二供養舍利_一。受_二八齋戒_一。可_レ爲_二毎月勤行_一云々。これが『感身学正記』中、舎利の初見である。暦仁の舎利供養以降、年ごとに舎利のしめる位置が大きくなっている。

つぎに舎利の性格を考えたい。

河内国高安郡教興寺の場合をみる。

教興寺は「秦川勝建立伽藍」であり、本尊は講堂の千手観音である。泉福寺から西大寺への帰途、雨露にさらされた教興寺をみて、

於是予顧_二佛法流布之恩_一。故悲歎_二之淚尤難_一禁也。雖_レ有_二興隆之志_一。貧道之身難_レ及_⑦。

荒廢した教興寺の姿を嘆いている。そして再興には、

發_二此願時_一。近邊尊卑勸_二少財_一將_レ助_レ之_⑧。

とあり、近隣への勧進により行なっている。

十一月廿六日夜。彼寺最初安置之佛舍利入御。廿七日期。拜_二見之_一。渴仰之余。脱_二一衣_一奉_二供養_一。教興寺興隆始也_⑨。

これによると、教興寺興隆時の仏舎利を拝見した叡尊は、感激の余り、一衣を脱ぎ舎利を供養している。さらに教興寺再興は次の文章によって始まる。

文永七年。三月下旬。持_二教興寺_一最初安置佛舍利。下河内國教興寺北津村郷。

依念生房清日々參_二教興寺_一。作_二故宿彼住室_一

假屋^一。安^ニ舍利^一。於^ニ彼御前^一。講^ニ十重禁戒^一。四月一日。一千六百九十四人授菩薩。隨^ニ喜聽衆^一。供^ニ養舍利^一。教興寺におもむき、舍利を假屋に安置し、その御前において十重禁戒を講じている。さらに後日、舍利供養におとずれた聴衆に菩薩戒を授けている。このように教興寺の再興は仏舎利の安置によって始まっている。そして仏舎利を安置すれば、舍利堂を中心としてその場は戒律を講義しうる弘律の道場となっているのである。この仏舎利は寺の中心となり、道場の中心となるものである。すなわち、五重・十三重層塔の場合と同類の性格をもっているのである。

つぎに、西大寺に所蔵されている金銅製宝塔の銘文をみる。

舍利之流布當時雖^ニ盛衰承^レ之明鏡古今尤稀而、去年秋不^レ圖感^ニ得招提寺舍利壹粒相傳之由來^一信仰無貳機縁之純熒感欽且^ニ千^一人以連連相續復相^ニ承奇瑞之舍利兩參粒^一或傳^レ從^ニ靈寺之寶壺^一或出^レ從^ニ名山之神油^一無上之法寶待時而自集^ニ興隆之祥兆^一、寧可不^レ崇^レ哉、因茲冶^ニ鑄參尺金銅寶塔一基^一奉^レ納^ニ此佛舍利^一所^ニ安置^一西大寺塔院也永爲^ニ一寺之靈寶^一將^レ傳^ニ萬代之後葉^一而已

文永七年^{歲次} 六月一日己巳 鬼宿

本願主西大寺衆首沙門叡尊 金曜

慶印

行事比丘 寶海

璋尊

銅細工 末長入道成佛

坂上 友末

銘文によると叡尊が本願主となり、文永七（一二七〇）年に舍利塔として西大寺塔院に安置するために、三尺金銅製宝塔を造立している。文永六年の八月に唐招提寺の仏舍利一粒の伝えられた由来に非常な感銘をうけ、三粒の舍利を唐招提寺の宝瓶より請けている。舍利塔を造立し、一寺の靈宝として、信仰の中心として、その靈驗を万代の後世に伝えることを願っている。塔銘文中にみえる去年秋の唐招提寺舍利のことは『感身学正記』に、

文永六年己巳六十九歳

去八月六日所_レ感得招提寺佛舍利_一。發_二造立金銅三尺塔婆之願_一。卽瑠璃寶瓶奉_二莊嚴_一之^⑨。

とみえる。この他にも叡尊は舍利塔を造立し、舍利信仰を重視したことがわかる。舍利信仰については、『覺禪抄』の「舍利卷」につきのような一文が記されている。

供_二養舍利_一生_二極樂_一。疑心者隨_二無間_一。

舍利供養はその功德により極樂にゆけることが説かれ、その実践方法として、

悲華經云、修_二治舍利塔_一比丘。於_二順生_一往生極樂^⑩。

とあり、『悲華經』は、舍利塔の造立が、往生極樂につながるものとしている。

『西大寺叡尊像納入文書』の中には、『悲華經』卷六・七が納められており、叡尊の舍利信仰・多重層塔・宝塔にみられる舍利塔の造立は『悲華經』に基因しているのである。

また、別の舍利感得談につきにあげる。

『感身学正記』仁治二（一二四二）年の条、

七月十六日夕。勸_二請常喜院安居人_一。於_二塔東石壇上_一。如法自恣始勤_二行之_一。其夜晚感_二夢想_一。大明神御隨喜

由也。^⑤

と記され、塔東石壇上で如法經動行の夜に夢想があった。夢想の具体的記述は『行実年譜』にみえる。

仁治二年辛丑（中略）厚一夕夢春日明神來現隨喜親告「冥護」繼詣「神祠」繙「經典」几上一心讀「誦之」舍利忽現「經卷之上」數百粒光明煜々照「耀心目」號曰「春日相傳之舍利」也。^⑥

これによると夢想にあらわれた舍利は春日明神相伝の舍利であった。唐招提寺・春日大明神両者の舍利はともに、貞慶の宗教の中で大きな位置をもっていた。

三崎良周氏は貞慶の行なった建仁二（一二〇二）年の『唐招提寺釈迦念仏願文』に『悲華經』の影響がみられ、穢土救済の思想を鼓吹したと指摘している。^⑦平岡定海氏は貞慶の信仰を「何といっても釈迦信仰であり、それが弥勒信仰、舍利信仰、春日信仰と多くの要素が共に釈迦に結合している。」^⑧とし、弥勒・舍利・春日信仰を今堀太逸氏はつぎのように指摘している。

『悲華經』の影響をうけた末世の釈迦信仰による民衆救済の一環として位置づけられるのである。またその浄土を阿弥陀浄土でなく弥勒浄土でなければならぬとするのは、末世の釈迦信仰をより徹底させたものである。^⑨叡尊は貞慶の關係の深い寺院―元興寺・三輪別所・海竜王寺・東大寺知定院などを重なるように戒律勸進を行なっている。叡尊の唐招提寺舍利への感得、春日相伝の舍利への信仰、舍利塔造立作善は、『悲華經』を根本經典として流布した貞慶の舍利・弥勒浄土への信仰に影響をうけ、それを引継いだのである。しかし、叡尊は貞慶の釈迦を根本とする弥勒・舍利信仰にとどまらなかった。

文永元年甲子六十四歳。（中略）九月四日。於「一室」。始修「七ヶ日光明眞言」^⑩。

文永元年初め 光明眞言会を行なっている。

『西大寺光明真言会願文』によれば、

光明眞言者。我本師釋迦如來。因位之昔。持念之時。放無量無數之光明。照三千大千之世界。降伏一切之魔軍。濟度一切之衆生。藉茲神咒之力。純證佛果之位。夫然則。法界智之爲所依也。

光明眞言は釈迦如來の無量無數の光明による功德を与えるものとして、

十惡五逆之群類。三途八難之衆生。悉蒙土砂加持之德。宣託金利安養之境。寔是菩薩普賢之願海。如來

清淨之法輪也。

とその功德を説いている。さらに光明眞言会に結縁した人々は、

出家五衆八齋戒輩。并此衆等之恩。所當寺之大檀那。爲期再會。於淨佛土。所載名字過去帳也。

このように結縁者に対し、死後淨土で再会を期するため、名字を過去帳にのせている。

叡尊は貞慶の釈迦に結合した弥勒・舍利の信仰をうけつぎ、それにとどまらず、結縁者の釈迦往生を完全にするため、光明眞言会を修することによって完成したのであった。すなわち、叡尊は生者の死後の往生極樂はむろん、亡者の救済をもおしすすめ、結縁者の層を拡大していったのである。また、

於没後之追福。恃衆中之救助。

とあり、上田さち子氏はこれをもって、「叡尊の宗教活動のなかには、こうした点でも、融通念仏、時衆、真宗仏光寺派と共通するものが認められる。」としている。叡尊は光明眞言を源信以来貴族社会に浸透した閉鎖的結社で

唱えられ、その功德をうけることを、融通念仏的により簡単な方法をとることにより、その受容層を貴族・一部僧侶階級から開放し、社会の底辺まで広げたのであった。その根本思想は時衆などにみえる阿弥陀如来による往生ではなく、釈迦如来における往生であり、十三重石塔銘文中にみえる「釈迦如来、当来導師弥勒如来」などに如実に

表われているのである。すなわち、三崎良周氏の指摘によるごとく、方法的により簡略化された念仏をとりつつも、王朝時代の浄土教や法然の唱えた「厭離穢土、欣求浄土」とは正反対の立場を明確に打ちだしたものであった。

四 西大寺末寺化の過程

明徳二（一三九一）年西大寺『諸国末寺帳』に記された数々の寺院は決して創建当初から西大寺末寺であったのではない。大半は叡尊在世—嘉禎元（一二三五）年三十五歳の「正月十六日。移住當寺」^④。後より末寺帳成立の明徳二年までの約百五十年間に、西大寺末寺として組みこまれたのである。

叡尊の勸進により改宗した寺院は、その多くが大和国内、およびその隣接地域に限られている。それら寺院は、般若寺・教興寺のように中興し、末寺としたものと、三輪別所、海竜王寺、東大寺知足院のように、貞慶の關係した寺院を訪ずれ、勸化をくりかえすことにより、西大寺末寺とした場合がある。

この章では、叡尊および、その弟子による西大寺末寺への改宗行為の過程をみ、その特徴を考えようとするものである。

叡尊および、その弟子による勸化活動を考えるため、前者では般若寺、後者では備後国尾道の堂崎浄土寺の場合をとりあげる。

般若寺については、上田さち子氏が「叡尊と大和の西大寺末寺」において、「後々まで残ったいくつかの寺を選び、それらの寺が、叡尊を、どのような状況のもとにうけいれたかを見てゆく」目的で述べており、「浄土寺」については、中尾堯氏が「備州における勸進聖の系譜」で「証空」について詳細に述べている^④。これらの研究に従いつつも、そこで述べられていない西大寺との関係について考えたい。

(1) 般若寺

般若寺は奈良市北山の地、奈良坂にあり、北に墳墓、南に疥癩の屋舎をそなえた地であった。上田氏は末寺化の過程にはふれず、文殊菩薩供養について述べている。

貧困の衆生でも非人でも、誰かが、たとえ形式的であっても、自力に徹し、身を挺して精進する時、他者に救済の道が用意されると考えられる。^⑤

としている。

叡尊・忍性と般若寺との関係は、仁治三（一二四二）年正月の発願により、その具体化の一つとして、

（三月）廿五日。遂ニ北山宿文殊供養ニ畢。^⑥

にはじまる。『感身学正記』の記述に従い、本格的の中興作業をみる。建長七年乙卯（一二五五）には、

當年春比。課「佛子善慶法橋」。造「始般若寺文殊御首」。楠木。自「七月十七日」迄「九月十一日」。首尾十八日。^⑦

仏師善慶法橋に命じて般若寺のために文殊菩薩像の首を楠木で作られており、

弘長元（一二六一）年辛酉

二月廿五日。文殊奉レ渡「般若寺」。御堂半作之間。構「彼厨子」。奉レ安置「置堂乾角」。^⑧

文殊像を作り初めて六年後に般若寺に渡している。弘長元年には、まだ般若寺本堂は完成されていない。

般若寺には一章でみた十三重石塔が造立されている。伊行末の作と考えられている。石塔内には、仏舍利、經卷が納入されていた。経箱には「建長五（一二五三）年」の墨書銘が残されており、塔納入時の年代がわかる。これより塔は、文殊菩薩像製作開始より二年前、本堂半作時より八年前には般若寺境内に造立されていたのである。舎利の安置をもって寺の礎とすることは、後の河内教興寺においてもみられ、十三重石塔の意義は前章において述べ

たとおりである。

『覺禪抄』の「造塔卷」建塔萬處事には、

諸經要集三云。僧祇律云。初起僧伽藍時。先觀_二度地_一。將作_レ塔處不_レ得_レ在_レ南。不_レ得_レ在_レ西。應_レ得_レ在_レ東。
應_レ在_レ北。^{⑤4}

とあり、伽藍を建てる時には、まず塔造立から始めることを記している。このように般若寺中興は伊行末による十三重石塔の造立により開始されているのである。また、弘長元年には伊行吉により笠塔婆が造立されており、叡尊の般若寺中興には、伊派石工が大きく関与していることがわかる。

文永四（一二六七）年に僧百三十八人によって整然と開眼供養が行なわれ、再興された。

抑當寺者。去弘長年中。奉_レ安_二置尊像_一以來、雖_レ不_レ經_二幾年序_一。自然兩三輩施主出來。造_レ添_二佛殿僧坊鐘樓食堂等_一。殆可_レ謂_二復本願之昔_一。數字之造營不_レ求_二自成_一。是偏大聖文殊善巧房便興。願主上人良惠无想之意樂計會之所_レ致也。^{⑤5}

このように往古の姿に復興させた後、

即爲_二西大寺之末寺_一。可_レ令_二管領_一之由。上人競望之間。遣_二同法比丘信空_一令_レ住。^{⑤6}

と、西大寺末寺として管領しており、それをより確固にするため叡尊の弟子信空を一時定住させているのである。すなわち、般若寺復興事業は、叡尊と伊派石工により、十三重石塔が造立され、弘律道場と化し、その後、文殊菩薩像を造立し、その礎を築いたのである。一応の復興が終ると、百三十八人という大量の僧動員で、西大寺の勢力の大きさを示し、末寺に組みこんだのである。さらに弟子信空は叡尊後西大寺第二代長老となる人であり、初代長老の在世中に二代長老に管領権を譲与し、西大寺末寺の固定化をはかったのである。

(2) 備後国尾道堂崎浄土寺

堂崎浄土寺は備後国高野山領太田庄倉敷地尾道浦にあり、創建は十三世紀中頃。尾道在の「光阿弥陀仏」によって、弥陀三尊像を本尊とする浄土堂・五重塔・多宝塔・地藏堂・鐘樓が建立され、真言宗高野山派寺院として成立している。そのさまは、「當浦邑老光阿彌陀佛或興立本堂、加古佛之修飭或始建堂塔、造立數軀尊像」と記している。

西大寺僧定證による浄土寺再興は嘉元四（一三〇六）年十月十八日付『定證起請文』に記されている。それによると定證は、永仁六（一二九八）年に浄土寺の曼荼羅堂に居住するようになり、永仁七年よりその再興に着手した。再興直前の浄土寺の姿は「當寺内本自有堂閣有鐘樓有東西之塔婆、無僧坊無依怙無興隆之伴侶、唯爲爲青苔明月之閑地、空聞晨鐘夕梵之音聲、此地爲軀」とあり、荒廢の一途をたどっていた。

定證の再興は、

定證勸進、十方檀那造營之。^⑧

とあり、檀那衆は

晉雖勸十方法界、多是當、浦檀那之力也。^⑨

尾道浦の檀那衆をその中心として、金堂・食堂・僧坊・厨舎などを勸進・造営していったのである。金堂にはその本尊として、大和長谷寺の観音菩薩像を模して彫んだ、金色観音菩薩像が安置された。像足下には『書記知識奉加之目錄』が納められており、さらに、「各牽三寸鐵尺木之結縁、爲預三千福輪文之引導也」^⑩とあり、結縁者が観音により極楽へ引導されることを説いた。奉加の目錄は、それを確實なものと結縁者に自覚させるため納められたのであり、西大寺における「有恩過去帳」と同じ意味をもっていたと考える。

嘉元四年九月上旬に金堂の完成。

同年九月二十九日、定證の招きにより、西大寺第二世長老以下僧六十余人尾道に着く。さらに、山陽、山陰より律僧六十余人来集。

十月一日より十三日までの十三日間に渡り、金堂上梁・曼荼羅供養などを行う。その様は、「日々講法時々説戒無有間斷」と示す。近隣地より幾千万の道俗結縁者が供養会に参集した。

十月十三日辰ノ刻舟出の後、浄土寺に止住した定證は、太田庄預所和泉法眼淵信より別当職を譲与され、西大寺末寺となった。

境内には再興前の石造宝塔とともに、無銘であるが、十四世紀初頭と考えられる十三重石塔が造立されている。さらにはほぼ同時期の大和型式の宝篋印塔が建ち、貞和四（一三四八）年の中国地方特有の宝篋印塔が造立されている。十四世紀初頭には備前国有漢で、西信が井野行恒と、さらに備中国笠神では沙弥実専が伊行経と協力し、石塔・碑を造立している。このように十四世紀初頭には山陽方面で、西大寺僧と伊派石工集団による石造物造立が盛んに行なわれており、浄土寺においてもその例外ではなかったと考える。

般若寺・浄土寺の西大寺末寺化の過程をみると、つぎのことが浮かびあがってくる。

(1)再興の当初石塔造立が重要な役割をもつ。伊派石工集団が、僧との協力により造立している。これは伊派石工集団が西大寺の石造集団として組みこまれ、地方への出造りを行なったことを表わす。

(2)仏像・堂塔の供養は、大量の僧を動員し長老の出座によって行なわれている。

(3)その後、別当職を譲与され、西大寺末寺となっている。

(4)再興勧進は、叡尊、あるいは彼の弟子によってなされている。

以上が西大寺末寺化への過程にみられる特徴である。

結

叡尊は舍利塔として多重石塔を勧進し、道俗の人々の弥勒浄土への導きを示した。同時に授戒会を施こし、菩薩戒を授けた。寺社供養には百人を超える律僧を参集しうる集団を形成し、『授菩薩戒弟子交名』に名を連ねた。西大寺において叡尊を頂点とする勧進集団が構成され、叡尊死後も第二世長老信空を頂点とする僧団に移行し、最大の力を發揮した。

嘉元四年の浄土寺律院化、吉井川河口の西大寺の発展、元応三年芦田川河口に西大寺末常福寺（現明王院）の建立へとつながり、十四世紀前半に備前・備中・備後国への圧倒的な広がりをもつ。同時に笠神碑の建立、常福寺を初めとする西大寺末寺には、開創期に近い時期の多重石塔がみられる。このように西大寺僧と同行した石工の活動が顕著になってくる。これら勧進僧と共に、石工は地方への波及を促進させていったのである。

しかし、こうした西大寺の活動は十四世紀後半には下火となりつつあった。地方社寺の末寺化は明徳の末寺帳においてほぼ完成し、追補はみられてもごく少数である。これは勧進僧の停滞によるものである。西大寺は叡尊以来大荘園経営を行なわず、光明真言・勧進活動により、寺院経営を行なっていた。強力な荘園のない西大寺にとって、高野山にみられるような荘園内からの僧侶の再生産は困難であったのであろう。その結果、十四世紀前半にみせた勧進聖集団は終息していったのである。

注

- ① 川勝政太郎「勸進僧に関する考察」・「講衆に関する研究」(『大手前女子大学論集』7)。
- ② 田岡香逸「播磨の石造美術と石材」(『日本歴史考古学論叢』1)。
- ③ 伊藤唯真「八法界ノ靈とその祭碑」(『日本民俗学会編『日本民俗学の課題』所収)。
- ④ 蘭田香融「朝日山信寂と浄土宗播磨義一播磨念仏衆序説」(『竹田聴洲博士還暦記念会編『日本宗教の歴史と民俗』所収)。これらの他に、木下密運「中世の念仏講」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』3) などがある。
- ⑤ 西村 貞「鎌倉期の宋人石工とその石彫遺品について」(『南都仏教研究会編『重源上人の研究』所収。一九五五年)。
- ⑥ 川勝政太郎「伊行末系石工とその作品」(『日本石材工芸史』)。
- ⑦ 『金剛佛子叙尊感身学正記』弘安六年。三月。十日。著龍門大藏寺。自十一日三ヶ日。略説十重。十四日。六百人授菩薩戒。
- ⑧ 『般若寺十三重石塔解体修理報告書』。
- ⑨ 『金剛佛子叙尊感身学正記』三三頁。
- ⑩ 笠塔婆銘文。
- ⑪ 注①に同じ。

叙尊における石塔勸進考

- ⑫ 「大和多武峯注進状」。「鎌倉遺文」一七二九。
- ⑬ 注⑥に同じ。
- ⑭ 『感身学正記』(『西大寺叙尊傳記集成』所収。監修奈良国立文化財研究所)。
- ⑮ 『行実年譜』(『西大寺叙尊傳記集成』所収。監修奈良国立文化財研究所)。
- ⑯ 『感身学正記』一三頁。
- ⑰ 『感身学正記』一三頁。
- ⑱ 『行実年譜』一二〇頁。
- ⑲ 『感身学正記』六一頁。
- ⑳ 蘭田香融「庶民の宗教」(『兵庫県史』第二卷)。
- ㉑ 『行実年譜』一九一頁。
- ㉒ 『行実年譜』一九一頁。
- ㉓ 『行実年譜』一九二頁。
- ㉔ 『浮島十三重石塔銘』(『伝記集成』四〇六頁)。
- ㉕ 『覚禅抄』造塔法「石塔得七種功德事」(『大日本仏教全書』所収) 一五七頁。
- ㉖ 『感身学正記』一三頁。
- ㉗ 『感身学正記』文永六年三五頁。
- ㉘ 『感身学正記』三五頁。
- ㉙ 『感身学正記』三五頁。
- ㉚ 『感身学正記』三六頁。

- ③① 『西大寺壇塔銘』(『伝記集成』所収) 三三二頁。
- ③② 『感身学正記』三五頁。
- ③③ 『覺禪抄』「舍利卷」(『大日本仏教全書』所収) 二四四六頁。
- ③④ 『覺禪抄』「舍利卷」(『大日本仏教全書』所収) 二四四四頁。
- ③⑤ 『感身学正記』一六頁。
- ③⑥ 『行実年譜』一二二頁。
- ③⑦ 三崎良周「鎌倉期の南都佛教における穢土思想」(『天台学报』3)。
- ③⑧ 平岡定海『東大寺宗性上人の研究並史料』下。
- ③⑨ 今堀太逸「貞慶の民衆救済―その宗教活動の思想的基盤―」(『印度学仏教学研究』27巻)。
- ④① 『感身学正記』三〇頁。
- ④② 『西大寺光明真言会願文』(『行実年譜』所収) 一四八頁。
- ④③ 『行実年譜』一四九頁。
- ④④ 『西大寺光明真言会願文』一四九頁。
- ④⑤ 上田さち子「貞慶の宗教活動」(『ヒストリア』第七五号)。
- ④⑥ 注⑦に同じ。
- ④⑦ 『感身学正記』八頁。
- ④⑧ 上田さち子「教尊と大和の西大寺末寺」(大阪歴史学会編『中世社会の成立と展開』)。
- ④⑨ 中尾堯「備州における勧進聖の系譜」(『瀬戸内海地域の宗教と文化』所収)。
- ⑤① 注④に同じ。
- ⑤② 『感身学正記』一七頁。
- ⑤③ 『感身学正記』二六頁。
- ⑤④ 『感身学正記』二八頁。
- ⑤⑤ 『覺禪抄』「造塔卷」一四六頁。
- ⑤⑥ 『感身学正記』三三頁。
- ⑤⑦ 『感身学正記』三三頁。
- ⑤⑧ 『定證起請文』『浄土寺文書』(『尾道市史』) 六八一頁。
- ⑤⑨ 『定證起請文』(『尾道市史』) 六八四頁。
- ⑤⑩ 『定證起請文』(『尾道市史』) 六八一頁。
- ⑤⑪ 『定證起請文』(『尾道市史』) 六八六頁。
- ⑤⑫ 『定證起請文』(『尾道市史』) 六八五頁。
- ⑤⑬ 『定證起請文』(『尾道市史』) 六八八頁。